■研究論文

John Derry Chinnery の生涯とその魯迅研究について

周　国強

John Derry Chinnery's Life and His Study of Lu Xun

Guoqiang ZHOU

抄録/概要/要旨　英国のシノローグ研究者 John D. Chinnery の生涯とその生きがいのある魯迅研究，特に 1920 年中期に繰り広げた魯迅と陳源の論戦の起因と結果及び影響に関する研究成果を考察、紹介した。

キーワード：　John D.Chinnery1，魯迅 2，陳源 3，「論戦」4.

1. はじめに

2019 年 12 月，私が編集委員を務める学術誌『アジア文化』[1]第 37 号は「魯迅と世界・特集」を出版発行した。そこに掲載された論文では日本を始め，韓国、東南アジア、北米、ロシア、フランス、ドイツ、香港・マカオ、台湾およびアラビア語の国々と地域の魯迅研究の状況を紹介しているが，残念ながら，世界において長い中国学研究の歴史を持つ英国は空白だった。実際，英国で長年に渡ってまじめに魯迅について研究する研究者―John Derry Chinnery（以下 Chinnery）がいた。

Chinnery は，英国で名が高い中国学研究者で，文学博士，専攻は中国語・中国文学である。1964 年から 25 年間 University of Edinburgh の中国語学部長を務め，在任中，数の多くの中国に関する功績を残した。特に 1989 年定年後，病弱な身にもかかわらず，より魯迅研究に没頭し，ついに約 30 万字の遺作“*The life and works of Lu Xun(1881-1936):Pioneer of Modem Chinese Fiction and Combative Essayist”*の初稿を書き終えたころ，逝去した。完成稿でないため，彼の魯迅とその思想を英語圏の人々に紹介したいという宿願がかなわなかあった。

Chinnery の研究と思想の更なる深い理解のため，まず彼の生涯を簡単に回顧したいと思う。

2. 生涯

2.1 幼少期の育ち環境

Chinnery というファミリーネームから見ると家系のルーツはフランスである[2]。1924 年 6 月 30 日，England 南東部の Essexshire で，父親の John Robert Chinnery（通称 Bob，1885－1958）と母親の Daisy St Clair Chinnery（旧姓 Hooper，1884－1979）の間に長男として生まれた。父親の Bob は第 1 次世界大戦中，良心的兵役拒否のために投獄された。戦後，London County Council の上級職書記官になった。晩年パーキンソン病を患い，ある夜ケアホームから「脱走」した後，肺炎で亡くなった。

Chinnery の幼少期の大半は Essexshire 西に隣接する Hertfordshire の Much Hadham 地方で送った。当時住む家には電気も下水道も通っておらず，生活はとても貧しかった，4 歳年上の姉，Mollie[3]とよく牧草刈りなどいろいろな野良仕事を手伝えたが，自然の豊かな環境の中に伸び伸びと育ったため，その素朴な郷村生活の体験と父親の反戦的な政治理念は後に彼らの人生に大きな影響を与えた。[4]

2.2 青年時代の勉強と従軍の経歴

1942 年，18 歳の Chinnery は London University, School of Oriental African Studies(SOAS)に入学した。同学院は英国の中国語教育と中国研究の重鎮である。中国の作家である老舎[5]と中国の最後の皇帝―溥儀（1906－67）年の外国人家庭教師 R.F.Johnston[6]が，ここで中国語の教員として語学教育と中国研究に従事していた。

Chinnery の中国名は「秦乃瑞」である。それは当時，SOAS で教員として務めていた蕭乾[7]から「金乃瑞」という中国名を付けられたが，後に Chinnery が「金」という名字は漢民族らしくないと思い，自

ら「秦」に改名した。[8]

Chinnery が SOAS で中国語を学ぶ理由は偶然であった。2008 年 3 月 20 日に BBC 放送[9]国際部の記者である鴻岡[10]の取材に対して Chinnery は当時の様子を次のように振りかえった。[11]

第 2 次世界大戦中に，時局に応じて，英国政府は中国語、日本語、ペルシャ語、トルコ語などの東方の言語ができる人材が必要になり，その人材の養成のため，奨学基金を設置し，若者がひかれるようにした。私も試験に参加した。しかし私は中東の文化に対しては，それほど興味がなかった。面接の時，試験官たちは私に聴いた中国語の発音をまねさせ，私の中国語の四つの声調を比較的正確に把握できたと思い，ゆえに中国語を選ぶことになった。

1980 年代中期 Edinburgh の Chinnery 宅で，この面接における一つのエピソードが聞いた。

面接の日，Chinnery は自転車で SOAS に行ったため，ある面接官から「中国には自転車が多いので，中国語にしょう」と言われた。

1 年半の勉強をしてから，1943 年末，Chinnery は徴兵によって英軍に入隊，インドに派遣された。服役している間にも現地で秘密活動をしていた中国共産党員の畢朔望（1918−99）に中国語を習い続けた。

終戦後の 1945 年末，英軍から除隊された Chinnery はクラスメイトの優等生 3 人と共に SOAS に召還され，教員として中国語科目を開いた。同じころ，大学時代からマルクス主義に傾倒した Chinnery は Communist Party of Great Britain（1920−56 年分裂）に加入した。1948 年，教えながら 1 年間半の学習を経て，同学院の修士学位を取り，学院の専任講師になった。1948 年 12 月 Leyser Helga[12]と結婚。1949 年，British-China Friendship Association(BCFA, 1949－60 年代分裂・解散）の創始者の一人になった。Frances Wood[13]博士は Chinnery をこのように評価した：「第 2 次世界大戦後，いち早く共産主義の中国に友好を示した英国人の一人でした。」[14]共産党員の身分はやはり彼の職業生涯に影響を与えた。当初，England 北部にある某名門大学は Chinnery を中国語学部長に任命する予定であったが，ある勢力によって白紙になった。これも Chinnery がその後，あまり政治に関与されない Scotland の大学に赴任した原因の一つであると考えられる。

1954 年英国文化代表団が中国に訪問した際，Chinnery は代表団の通訳を担当し，周恩来総理と会見した。それは彼の初めての中国訪問になった。

2.3 学者と教育者として

1955 年，Chinnery は “*Problems of literary reform in modern China*”の論文を経て，SOAS の博士号を取った。その 2 年後の 1957 年，Chinnery は客員研究員として 1 年間北京大学の中国言語文学部で研修生活を送った。大学時代に中国語より中国文学に興味を持つようになった Chinnery は，研修先の北京大学で中国現代文学の授業を受けた。その時，夫人の Helga は北京外国語学院で英語を教えていた。彼らは週末によく自転車で北京から約 50 キロ離れる「十三陵ダム」の建設現場へ行き奉仕活動を行った。さらに，長い休暇を利用して家族と魯迅の故郷紹興にも訪問し，そこで見た詩情的、素朴な田舎の生活風景は Chinnery の郷愁を誘った。

1965 年，Chinnery は Scotland の University of Edinburgh で中国語学部を創設した。彼は当時にこれからの抱負について，こう語った：「将来、中国は世界の舞台により重要な役を担うことを私たちは意識した。University of Edinburgh で中国語学部を設置することは，これから来る時代に対応するための準備だ。」[15]

1966 年 5 月，University of Edinburgh で Chinnery は有志者と一同に Scotland-China Association（SCA，1966 年ー）を立ち上げた。以来彼は責任者の一人として自身の役目を果たした。

1972 年 8 月末に，Chinnery が団長として率いる「SCA」一行は広州を訪問した。到着の翌日，Chinnery は心臓病の発作で倒れ，2 ヵ月間入院治療生活を送る事となった。帰国後，彼はこの闘病生活を顧みて記録した。

その後の 1973 年、75 年、77 年 2 年置き「SCA」友好訪中団を引率して中国を訪問。

1975 年香港中文大学で訪問研究を行った。

1979 年，魯迅の故郷の紹興を再訪問した。同年夫人の陳小瀅は北京大学西洋言語学部の英語外国人講師として北京に赴任、一人息子の Colin[16]と 3 年間半北京西の郊外の外国人専用のホテル「友誼賓館」に住むようになった。その間， Chinnery は英、中両国間に行ったり来たりしていた。

1985 年，Edinburgh は西安とで姉妹都市関係が

結ばれ， Chinnery は招待を受け，西安で協定の調印式典に参加，中国語で祝辞を述べた。

1989 年から，University of Edinburgh から退職した Chinnery は中国に旅行したり，中国で暮らしたりする時間と機会が増え，より深く中国社会と文化に注目し，研究することができた。

3. 研究とその成果

3.1 魯迅研究について

中国文化と中国現代文学においてよく理解していた Chinnery は，多くの中国人が W. Shakespeare（1564－1616）など英国の偉大な作家たちを知っているのに対して，英国人は中国の孔子（BC. 552 or BC. 551－BC. 479）くらいしか知らなく，魯迅などの中国現代作家についてめったに知らないということに気づいた。彼は英語圏の人々，特に英国人に孔子以外に，魯迅のことも知ってもらい，中国人が Shakespeare の思想を理解できるように魯迅の思想も理解してもらいたいと思った。魯迅が後世に残された精神遺産を世界の読者に広めることは Chinnery の魯迅研究の初志である。[17]

前出の BBC 放送の取材の中に，記者から中国文学について，特に気に入った作家と作品は何かと聞かれると，「中国の文学，古代のものだとしたら，唐詩、または小説の『紅楼夢』[18]が一番好きで，現代のものなら，私が特に魯迅を研究していたから，やはり彼の作品を一番好きだ」と答えた。約半世紀の歳月をかけ，魯迅研究をし続けた Chinnery は魯迅についていくつかの学術論文を書いた。また，晩年になると病を患いながら，研究の集大成の魯迅評伝を書き終えた。1955 年，Chinnery は博士論文のなかに，魯迅の文学思想と創作についても論述した。さらに 1960 年と 1982 年，Chinnery は魯迅に関する学術論文二つを発表した。中国の学者が Chinnery のこの二つの学術論文についてこう評価した：

1960 年，Chinnery は“*The Influence of Western Literature on Lu Xun's 'Diary of a Madman'*”[19]という質が高い論文を発表した。ロシアの作家の N.V.Gogol（1809－52）とドイツの思想家の F.W.Nietzsche（1844－1900）は魯迅の創作に与えた影響，または西洋の現代思想、医学、心理学の知識は魯迅の創作に与えた影響について確実的な分析をした。Chinnery は魯迅への影響は非常に複雑だと考える。 Chinnery により，魯迅は Nietzsche の著作を読んでから，個人主義に関する認識を深めた。魯迅は Nietzsche と同じように，民衆が歴史の中に発揮する作用を軽視したが，魯迅は「民衆を怖がりながら憎んでいる」の Nietzsche とは違い，「魯迅は弱小で無援な人を守り， Nietzsche は弱小な人を蔑視し，征服者や略奪者を敬服する。」つまり，魯迅に対して「Nietzsche の著作は思想の金鉱に間違いない。」彼はその中から思想観念を鑑みることができるし， Nietzsche の局限性をこえることもできる。

1982 年 Chinnery は“*Lu Xun and Contemporary Chinese Literature*”[20]の論文を発表した。論文に蘇叔陽（1938 年－2019 年)、高暁声（1928 年－99 年）など中国の現代作家たちを例にして、彼らの文学活動においては多方面から魯迅の現実主義の文学伝統を継承、発展されたことを検証した。具体的に，彼らは一般人の生活に関心を持ち，自分の作品の主人公として登場させた。彼らは庶民の生活を見つめて，1950 年代以来ソ連文学を模倣し，流行していた現実から離れ、かつ模式化された生活の表現方法を敬遠した[21]。

3.2 集大成の“*The life and works of Lu Xun(1881-1936):Pioneer of Modem Chinese Fiction and Combative Essayist*”

魯迅研究の専門書として書かれたこの本は約 30 万字で，Chinnery の晩年の大部分の時間を費やした。この作品はなめらかで，質朴なことばで，できるだけ全面的に魯迅の生活、思想とその創作を英国の人々に紹介するつもりであったが，逝去のため出版まで至らなかった。

この著作の最も価値があることは魯迅と陳源[22]との論戦の起因に関する指摘である。それは Chinnery が長年の研究と論戦の当事者の陳源から得られた第一次資料に対する緻密な考察した結果であると考えられる。

陳源は 1912 年 15 歳の時英国に留学。高校卒業後，University of Edinburgh，後に London University に留学，政治経済学を専攻し 1922 年 The London School of Economics and Political Science（LSE）の社会科学博士の学位を獲得。帰国後，北京大学外国語学部の教授、武漢大学教授兼ね文学院院長を歴任。1924 年，胡適[23]の支援を受け，徐志摩[24]、王世傑[25]な

どと共同で『現代評論』を創刊，コラム「閑話」の主筆として務め，多くのエッセーを発表した。1946年に中華民国政府在 Paris の UNESCO の初代代表に就任，Paris の生活費が高いため，会期以外に London に住まいを構え，夫人の凌叔華[26]と一人娘の陳小瀅と暮らした。Chinnery は 1950 年代から陳源と交流があり，二人は意気投合，仲が良かった。さらに陳源が病歿した年の 1970 年に，当時 BBC 放送国際部記者だった陳小瀅と結婚した。

Chinnery は後に義父になる陳源と密接な関係を持っているが，彼が魯迅と陳源の論戦の起因について，偏らずに、客観的に論述した。この“*The life and works of Lu Xun(1881-1936):Pioneer of Modem Chinese Fiction and Combative Essayist”*にある関連な章節を読むと学者としての独立的な考えを保って、中立な立場を堅持していたことがわかる。

1925 年 1 月，国立北京女子師範大学の楊蔭榆[27]学長が学生たちの政治運動への参加を反対したため，学生たちによる学長を追放する運動が起こった。教員として同校の教壇に立った魯迅と 6 人[28]の同僚が学生を擁護する「北京女子師範大学の騒乱に関する宣言」を「京報」（1925 年 5 月 27 日）に発表した。魯迅などと反対の立場に立っているのは「現代評論」[29]の同人たち，ほとんど欧米留学した知識人である。そのメンバーの一人の陳源が 1925 年 5 月 30 日，『現代評論』のコラム「閑話」で初めて魯迅に挑戦した。これは論戦の引き金になったと今まで学界の通説である。

陳源は「私たちは新聞で女師大 7 教員の宣言を読んだ，以前女師大に起こった様々な騒動の背後に，北京教育界の最大の勢力である某籍、某系の人が密かに励んでいた…私たちから見るとあまり不公平だ。」もちろん文中の「某籍」は「紹興」籍で，「某系」は「国文学部」を指している。Chinnery はこれが陳・魯「論戦」の起因のヒントになると認識した。

1926 年，「論戦」に疲れた陳西瀅が応戦の文章を書くことをやめってしまった。こうした意味で，魯迅はこの論戦の勝者となった。これに対して，Chinnery は「このような結論を下したら，魯迅と陳西瀅の論戦の価値と意義を簡単化してしまう」と指摘した。彼は単純に論戦の勝負を判定するより，論戦の成因と文化意義などを考察することが重要だと考えた。Chinnery は魯迅と陳源のそれぞれの出身地から，彼らの論戦の起因を分析した Chinnery は，魯迅が北洋政府[30]の教育部の官僚として任職する時代（1912－26）に，江蘇、浙江両省の知識人が不仲の状況についての具体的な描写がある。

1912 年 8 月の初め，魯迅は成立したばかりの「中国通俗教育研究会」（1912－？）に参加した。彼は特別に研究会へ参加要請を受けたが，7 月 30 日の日記に「「中国」と名づけているけど，呉[31]の人ばかりだ。良いことがあるか」[32]と書いた。確かに，魯迅は同郷出身の浙江省の人に対して親しみを感じ，江蘇省の知識人が中国の統治者と西洋の列強に屈服する傾向があると思った。1920 年代における胡適や陳源などの相手との論争の中に，魯迅のこの心理傾向がより鮮明的に見られる[33]。

Chinnery は「女子師範大学の学長と陳西瀅は同じく江蘇省無錫の出身」だと気づき，「これはただの偶然ではないかもしれない」と思った。ゆえに，彼は「陳西瀅と魯迅の論戦の背景には，ある地域や宗派の意識が要素として働いている。」[34]と考えた。また，Chinnery は自分と陳源が 1960 年代のある談話内容を証拠として，「この問題を聞かれた時に，陳西瀅が浙江省の同窓会の人と江蘇省の同窓会の人はいつも違う場所で集まると説明する。」[35]

魯迅は『朝花夕拾・無常』のなかで，当局の意思に順従的な無錫の文人に「無錫は中国の模範県だ」[36]と風刺した。

かつて魯迅と交流があった日本人の学者小川環樹[37]が晩年に 1934 年から 2 年間中国留学中，魯迅との交流について，魯迅が蘇州（無錫と同じ呉の地である）の文人のことを心から蔑視しているという当時の印象を追憶した[38]。

Chinnery が地域文化の角度から魯迅と陳源の衝突を分析することは，その理由と意義がある。しかし，当時の知識界では，論戦が発生する原因はただの地域の問題ではないと考えた。なぜなら，当時多くの江、浙両地の知識人はこの論戦に参加していないことである。文化人のなかでもお人好しの銭仲書[39]は無錫の出身で，生涯にあまり「中国‘思想界的权威者’」[40]になった魯迅のことを口にしなかった。

陳・魯の「熱戦」する時に，魯迅と同じ浙江省の出身の徐志摩がかえって陳源を支持する陣営に立った。その理由について，私は三つ挙げられると考える。（1）1924 年，徐志摩は魯迅と音楽に関する論争があった。(2) 陳源と同じ欧米留学の経験があった。（3）陳源の恋人の凌叔華を慕っていた[41]。

魯迅と陳源の論戦が起こった理由は，深層的な思想や文化に内因があると考えられる。Chinnery は著作の Chapter 17, Section 1 に，この点についても言及した。魯迅と陳源の衝突は「更に深層的な原因は，陳派の英、米の教育の背景と魯派の日、仏の教育の背景にある」と彼は考えた。また，「魯迅と彼の留日の友人たちは，ほとんど中国伝統的の丈が長い服を着ている。陳西瀅などの英米に留学した学者たちはスーツを着ることが多い。」[42]とこの２派の日常生活にある相違についても言及した。生活や趣味の違いより，この 2 派の価値観の違いにもっと注目すべきだと考えられる。

Chinnery は「従来，魯迅は英米に留学した中国の知識人たちの意見に対してつねに疑問をもっている。魯迅はこれらの人たちに強く反感を抱いているのは，彼らは中国人民が経験している苦難な生活にあまり確実的な関心を持っていないことと，有権者に妥協する傾向があることです。（中略）英米からの帰国派の偽善性を察知し，さらに彼らへの反感を増した。」と指摘した。

確かに，陳源は親英派である。少年時代から英国留学，それは彼の人生観、価値観が形成する大事な時期である。留学時代の日記は紛失[43]したため，当時の状況はよくわからなかった。Chinnery はこの著書のなかに，複雑で多元的な陳源の人物像を呈しようとした。彼は陳源が若い頃に英国で骨身を惜しまずに勉強し，大量の書籍を閲覧し，その政治、司法、文学、戯劇、社会について深く研究したことを詳細に紹介した。しかしながら，陳源は英国文化をまるごと無条件でのみこめではなかった。彼が英国は民主的な政治体制と現代的な社会制度をもっている一方，本質的に帝国主義の国であるという見方で、英国はキリスト教の慈悲を標榜しているが，中国への侵略においては西洋の列強国と同じように厳しく批判されるべきだ。この問題については，陳西瀅と魯迅の考えは特に違いがない。ゆえに、論戦が勃発したころ、凌叔華は燕京大学時代の恩師で、魯迅と同調する周作人と恋人の陳源の関係を緩和しようと試みた。胡適も熾烈な白兵戦のように論争している二人に，数年前に新文化運動[44]を提唱するため，互いに協力し合ったことを忘れないように注意する手紙を書いた。しかし，彼らの努力はあまり効果が出なかった。

Chinnery はまた，「各派の軍閥が目先の利益にこだわり，中国の将来を謀らず，西洋の列強に操縦されることを認めることに反対した陳源と魯迅の思想の分岐は，陳源が理性的で、中庸的で、非暴力的な革命方式で中国の改革を推進することにある。」[45]という実情がはっきりわかっていることについても指摘した。彼は魯迅と陳源の思想観念の相違についての比較は正確的で客観的であることが断言できる。

魯迅と陳源の論戦は二人の間に起きた感情的な争いではない。実は，彼らの論戦は奥深くて文化的な意味がある。この論戦により，五四運動[46]以降，新文化運動を鼓吹する知識人たちの内部の分裂が見られる。Chinnery は，胡適と李大釗[47]の「問題と主義」についての論争は，新文化陣営に両派の知識人たちの間の重大な分岐点であると考えた。魯迅と陳源の論戦はかつて同じ戦線にいた若い世代の知識人たちが改めて分裂し始まることが示されたと述べている。新文化界の知識人たちの分裂は避けられない成り行きに決まった。

4. John D. Chinnery の中国に関する主な作品一覧

4.1 著書と訳著

1．“*Mao Tse -Tung Unrehearsed. Talks and Letters: 1956-71*,”Translated by John D.Chinnery and Tieyun. New York: Penguin Book.1974.

2．“*English & Chinese Proverbs & Phrases*（英漢俚諺合璧），”Beijing: New World Press,1984.

3．C. Scott Littleton ~et al, “*Eastern　Wisdom: Hinduism, Buddhism, Confucianism, Daoism, Shinto*,” London: Duncan Baird,1996.

4. “*The Memoirs of Xin Fengxia*,”Oxford: Oxford University Press,2001.

5．“*Treasures of China: The Glories of the Kingdom of the Dragon*,”London: Duncan Baird,2008.

6. “*The Civilization of Ancient China(The Illustrated History of the Ancient World),”*New York: Rosen Pub Group,2012.

7．“*Real life opera of northern China*,”Beijing: New World Press.2016.

8．“*The life and works of Lu Xun(1881-1936): Pioneer of Modem Chinese Fiction and Combative Essayist,”*

4.2　論文と随筆

1．“*Coronary in Canton,”* Sine, Spring 1973.
2．“*Trade Unions Re - emphasised,”*Sine,Vol.2, No.3,1974.
3．“*Chinese Graphic Art*,”Sine,Vol.3,No.3,1975.
4．“*Visit of the Xi'an Municipal Delegation,”* Sine, No.1,1985.
5．“ *Edinburgh China Week*,”Sine,No.1,1987.
6．“*An Overview of the SCA's 1987 Friendship Delegation Tour,”* Sine, January 1988.
7．“*The Teaching of Chinese in Scotland,”*Sine, January 1989.
8．“*Some Observations on the Crisis in China,”*Sine, September 1989.
9．“*A Note on the Early History of the SCA*,” Sine, November 1996.
10．“*Confucius and Modernisation*,” Sine, Spring 1997.
11．“*Celebrating the 50th Anniversary of the PRC*,” Sine, November 1999.
12．*“What's in a (Chinese) Name?*” Sine, October 2000.
13．“*Problems of literary reform in modern China，”* Doctoral Dissertation,1955.
14．“*The Influence of Western Literature on* Lu Xun's *‘ Diary of a Madman* ', “Bulletin of SOAS, Vol.23, No.2,1960.
15．“*Confucianism in Modern China*,”Sine,Vol.3, No.1,1974.
16．“*Lu Xun and Contemporary Chinese Literature*,” The China Quarterly, No.91.1982.
17．“*Lu Xun's Childhood, Part 1*,”Sine, October 2002.
18．“*Lu Xun's Childhood, Part 2*,”Sine, February 2003.
19．“*Forty Years of the Scotland-China Association, Part 1*,”Sine, October 2006.
20．*“Robinson Crusoe in China,”*Sine, January 2009.

5．結びに

鲁迅は作家として文壇に登場してから陳源の以外に，梁実秋[48]、徐志摩、胡適、林語堂[49]、高長虹[50]、施蟄存[51]、穆木天 （1900－71, 詩人。東京帝国大学卒業)、郭沫若、葉霊鳳（1905－75, 作家)、沈従文(1902－88, 作家)などの文人の政見や文風、ひいては私生活までについて論戦を繰り広げた。これらの論戦に関して，1949 年以降の新中国ではすべて「政治話題」の扱いとなり，学術的な議論はタブーになった。 Chinnery は 50 年以来魯迅を研究し，実績を積んだ。特に陳源との特別の関係で，当事者の陳源から直接に話を聞き，第一次資料を入手することもできた。学者として客観的，かつ独自の判断で上述の推測を成立させたのは評価できると思う。

参考文献

１．陳源：“西瀅閑話，”台北：文星書店，1964 年。
２．Su Hua: “*Ancient Melodies,”* London: The Hogarth Press,1969.
３．魯迅：“魯迅全集，”北京：人民文学出版社，1981 年。
４．陳源、凌叔華：“陳西瀅・凌叔華散文，”北京：中国広播電視出版社，1992 年。
５. Hong Ying: “*The Art of Love,”* Translated by Nicky Harman & Henry Zhao. London・New York: Marion Boyars,2002.
６．傅光明：“論戦中的魯迅，”北京：京華出版社，2006 年。
７. Sasha Su-Ling Welland: “*A Thousand Miles of Dreams—The Journeys of Two Chinese Sisters*,” Lanham・Boulder・New York・Toronto・Plymouth UK: Rowman & Littlefield Publishers,INC.2007.
８．王家平：“魯迅域外百年伝播史：1909-2008，”北京： 北京大学出版社，2009 年。
９．朱映暁：“凌叔華伝，”南京：江蘇文芸出版社，2011 年。
10． Patricia Laurence: “*Lily Briscoe’s Chinese Eyes - Bloomsbury, Modernism, and China, ”*Columbia: University of South Carolina Press,2013.
11．管賢強、鄭国民 主編：“民国經典国文課時代巻－自由信念，”北京：商務印書館，2016 年。
12．徐志摩：“徐志摩书信集，”南京：江苏人民出版社，2017 年。

[1] 日本アジア文化総合研究所，1973 年創刊。

[2] 1980 年代初，北京で本人から聞いた。

[3] Mollie St Clair Richards.（1920－2009）。元看護師である。核軍縮キャンペーンの運動家で，The Aldermaston Marches（1950 年代と 1960 年代の反核兵器デモ）の多くに参加し，2 度逮捕された。1980 年代に Wales の Gwynedd 州の Llwyngwril 村に移住，そこでアートクラブを運営し，生涯の郷土芸術への関心を再開した。

[4] 以上家族の情報は Chinnery の甥の Geraint Richards から提供。

[5] 1899－1966, 作家、脚本家。文化大革命運動（1966－76）が始まる真っ先に批判を受け、北京の太平湖に自沈した。1924－29 年 SOAS で中国語講師として務めた。

[6] 1874－1938。中国名：莊士敦。University of Edinburgh と Oxford University を卒業後，1898 年に英国の植民地政府の役人として中国に赴任，「中国通」である。1919 年，溥儀の外国人家庭教師として英語、数学、地理学などの西洋理論を教えた。1930 年帰国，1937 年まで SOAS で中国語教授として務めた。

[7] 1910－99，作家、記者。1939 年 SOAS の教員になり，後に欧州戦場で唯一の中国人の戦地記者として活躍，San Francisco Conference，Potsdam Conference，Nuremberg Trials などを取材、報道した。

[8] 1980 年代初，北京で本人から聞いた。

[9] British Broadcasting Corporation.

[10] Paul Crook．中国名：柯鴻岡。1940 年代中国共産党が主導する革命運動に参加した英国人の父（David Crook, 中国名：戴维· 柯鲁克, 1910－2000）とカナダ人の母（Isabel Crook，中国名：伊莎白· 柯鲁克，1915-）を持ち，中国で生れ育ち，文化大革命後の 1970 年代後期に渡英。筆者の 1980 年代中期，英国留学時代の友人の一人である。

[11] http://www.bbc.co.uk/lifeintheuk/story/2008/03/080318_coupls5.shtml

[12] 1926－91。二人の間に 3 人の息子がいる。

[13] 1948－。中国名：吴芳思，歴史学者、大英図書館中国語部長。

[14] “*John Chinnery Obituary,”* The Guardian,2010. 11. 23.

[15] John D.Chinnry:“*The Teaching of Chinese in Scotland*，”Sine,No.1,1989.

[16] Colin Chinnery.1971－。中国名：秦思源。10 歳のとき，カンフー映画『少林キッズ（少林小子）』で Jet Li（李連傑, 1962 年－）と共演。大学時代の北京師範大学留学中，人気ロックバンド“ツボ（穴位）”のメインボーカルになった。SOAS 卒業後，大英図書館敦煌学の研究者を経て，英国駐中国大使館文化部門の責任者になった。今現代アーティストとして活躍中である。

[17] 2019 年 9 月，北京で陳小瀅から聞いた。

[18] 清朝中期（18 世紀中頃）に書かれた長篇章回式白話小説。

[19] John D.Chinnery. Bulletin of SOAS, Vol.23，No.2, 1960 年.

[20] John D.Chinnery. The China Quarterly．No.91，1982.

[21] 王家平：“魯迅域外百年伝播史：1909-2008，” 北京大学出版社，2009 年，pp. 208－211.

[22] 1886－1970，文学評論家、翻訳家。江蘇省無錫の出身。ペンネームは西滢である。Nietzsche 以外に，Ivan Turgenev（1818－83）、Johann W. Goethe，（1749-1832）等の小説を翻訳した。1943 年から英国に移住。

[23] 1891－1962, 学者，教育者。1910 年アメリカに留学，1917 年帰国して口語文学を提唱して文学革命の口火を切った。1938 年駐米大使となった。1946 年帰国して北京大学学長となった。

[24] 1897－1931，詩人、散文家。Clark University で銀行学、Columbia University で経済学を学んだ。1921 年から King's College, Cambridge に留学中，ロマン派の詩に傾倒した。1922 年中国に帰り「新月社」を創設した。1931 年に飛行機事故で亡くなった。

[25] 1891－1981, 政治家、法学者。Université de Paris 法学博士。1945－48，中華民国の外交部長。

[26] 1900－90, 作家、画家。北京で裕福な官僚家庭に生まれた。13 歳の時，兄弟 4 人と神戸の同文学院に留学したが，翌年の夏，4 人の兄弟が神戸山中の布引滝で溺死，失意な帰国になった。大学時代から，松岡洋右（1880－1946）とあいまいな関係になった，英文の書簡を交わした（John Chinnery：“*The life and works of Lu Xun， Epilogue”*）。日本語も勉強した。後に東京で個展を開催した。英国女性作家の Virginia Woolf（1882－1941）をはじめ，Bloomsbury Group のメンバーと親交した。Virginia Woolf の甥で、詩人の Julian Bell（1908－37）とのスキャンドル（Sasha Su-Ling Welland:“*A Thousand Miles of Dreams—The Journeys of Two Chinese Sisters．Chapter 17. The Entangling Net,*” pp. 247-265.）があった。日本において，作家の谷崎潤一郎（1886－1965）との交流があった。

[27] 1884－1938，江蘇省無錫の出身。1907 年国費で東京高等師範学校に留学。1918 年 Columbia University に留学，教育学の修士学位を獲得，1922 年帰国後上海で教師をした。1924 年北洋政府の教育部から中国初の女性

の大学学長―国立北京女子師範大学の学長に任命されたが，1926 年学生運動によって免職された。以後蘇州女子師範学校などで執教していた，1937 年蘇州で日本軍によって殺害された。

[28] 周作人（1885－1967，魯迅の弟、作家、文学評論家、翻訳家，新文化運動の代表人物である。法政大学、立教大学に留学。），馬裕藻（1878－1945，教育者。東京帝国大学卒業)。沈尹默（1883－1971，書道家、教育者。二度日本に遊学)。李泰棻（1896－1972，歴史、地理の教員，河北省出身)、銭玄同（1887－1939，教育者。早稲田大学に留学)。李泰棻の以外には全員浙江省の出身，国語の教員，かつ留日経験がある。

[29] 総合週刊誌，1924 年 12 月北京で創刊，1928 年 12 月に廃刊。主な同人有志は王世傑、燕樹棠（1891－1984，法学者。Yale University 法学博士)、周鯁生（1889－1971，法学者。University of Edinburgh と Université de Paris 国際法博士)、陳源、陳翰笙（1897－2004，歴史学者。Universitat zu Berlin 博士)、張奚若（1889－1973，政治学者。Columbia University 修士)、胡適などがある。欧米に留学した者が多い。内容は政治、経済、法律、文芸、哲学、教育、科学など多彩である。

[30] 1912－28，袁世凱など晩清に形成した北洋軍閥を中心として構成された中央政府。

[31] 春秋時代の列国の一つ，現在の江蘇書省の南部と浙江省の北部にある。

[32] 『魯迅全集』，第 15 巻，p. 13.

[33] Chapter 5, Section 5.

[34] Chapter 17, Section 1.

[35] 同上

[36] 陳源が「現代評論」第 2 巻第 37 期「閑話」（1926 年 8 月 22 日）のなかに「無錫は中国の模範県」と自慢した。

[37] 1910－93，中国文学者，元京都大学文学部長。

[38] 劉樺：“魯迅は、あんなではなかった，”「人民中国」デジタル版，2020 年 7 月 20 日。

[39] 1910－93，作家。Oxford University 卒業。夫人の楊絳（1911－2006）は楊蔭榆の姪である。作家、翻訳家。

[40] 陳源：「晨報副刊」，1926 年 1 月 30 日。

[41] 徐志摩：“徐志摩书信集，”南京：江苏人民出版社，2017 年，pp. 288-295.

[42] 陳小澄は父親の陳源が中国にいる時，日常的に中国式の服装“長袍”を着ていた。（傅光明：“陳西澄家書:致陳小澄，”人民文学出版社,『新文学史料』, 2020 年, 第 3 期。2020 年 8 月 31 日陳小澄から送られた WeChat 版)。筆者が陳源の写真を考察するとスーツ姿のものは少ない。

[43] 1980 年代中期，London 郊外の Swiss Cottage に住む凌叔華を訪問したとき，筆者が陳源の日記の一部分を廃棄処分したと本人から聞いた。

[44] 1916－21 にかけて展開された文化運動。陳独秀（1879－1942，中国共産党の創立者の一人，早稲田大学に留学)。魯迅、胡適、周作人、郭沫若（1892－1978，作家、政治家。九州帝国大学医学部卒業）らを中心に，中国社会の近代化と近代思想、文化の普及をめざした。1919 年の五四運動の原動力となった。

[45] Chapter 17, Section 1.

[46] 1919 年 5 月 4 日，北京の学生の示威運動をきっかけとしておこった中国の反帝国主義支配の民族運動である。

[47] 1889－1927，中国共産党初期の指導者。早稲田大学に留学。

[48] 1903－87，作家、文学評論家、翻訳家。Harvard University 文学修士。

[49] 1895－1976，作家。Harvard University と Universität Leipzig に留学。

[50] 1898－1956，作家。日本、ドイツ、フランス留学。

[51] 1905－2003，作家。日本の“新感覚派”文学の影響を受けている。